

## 「憂い・孤独・故郷」考

### ファウストの憂いと『行人』の一郎の孤独

柳 谷 保\*

#### I 『行人』の「塵労」第36節における一郎の「地獄の叫び」

修善寺の山路を駆け下りながら、一郎は「孤独」に対して「わが故郷」と叫ぶ。

(…)その時私も兄さんの口を迸る Einsamkeit, du meine Heimat Einsamkeit!  
(孤独なるものよ、汝はわが住居なり)というドイツ語を聞きました。

英訳を紹介する。

(And leaving me behind, he rushed down the mountain path alone.)  
As he did I heard him exclaim "Einsamkeit, du meine Heimat  
Einsamkeit" (Loneliness, loneliness, thou mine home.)

「孤独なるものよ、汝はわが住居(すまい)なり」という漱石の和訳を尊重するとして、彼は、「孤独よ」ではなく「孤独なるものよ」と表現し、また「わが故郷(ふるさと)よ」ではなく「わが住居(すまい)よ」と解釈し、英訳も home となっている。英語の home は「家(や)」をも「故郷」をも意味するが、ドイツ語の Heimat はどちらかといえば「故郷」を意味する。ただし Heimkehr は「帰郷」である。英独いずれも ho- hei- の部分に「定住」の意味がある。Heimat を「故郷(こきょう・ふるさと)」ととるか「住居(すまい)」ととるかは微妙な問題だが、「故郷」ととれば「今は異郷にある」ことを前提とするだろうし、「すまい」ととれば「今は戸外にいる」ことになるであろう。いずれにしても「安住」ないし「実現」の途上にあることは確かなようである。これは「孤独」への肯定でありまた拒絶でもある。ちょうどニーチェ＝ツァラトストラの「深山への郷愁」と「巷間への郷愁」のアンビヴェイランスに似ている。その意味で、一郎の「孤独」への郷愁は、日本的ではなく、19世紀末の西欧の、近世的・近代的な自我の葛藤である。「神は死んだ」の孤独である。「聖書」と「信仰」から離れ、「宇宙」と「世界」のなかで自らを定位しなければならない人間の道行きである。「理性」「論理」「家族」「人類愛」ははたしてその道行きの viaticum (糧) となるのだろうか。和歌山で二郎は一郎に、嫂お直の貞操を調べてくれるよう依頼されるが、この問題は物語の結末では意味を失う。「修善寺」という名前が気に入ったようだと、Hさんは手紙で報告しているが、「善を修業す

\*大学教育総合センター(ドイツ文学)

る寺」は日本にはあっても、一郎には存在しないのであろう。つまり一郎の「孤独」は西欧的「孤独」、「信仰」を疎外された「近代的自我」の「孤独」なのである。ちょうど村落がダム湖底に沈んで、故郷の山村を離れ、都会に出て「市民」となったかつての「村民」のように、西欧の「近代的自我」は、「聖書」と「信仰」という「中世的束縛」から解放され、「エゴ」と「テクネー（知の実践）」を頼りに「市民社会」あるいは「近代的国家社会」を形成・発展させていく。つまり「神」の前の「孤独」（良心）から「神不在」の「孤独」（「テクネー」至上主義）へと変貌する。デューラーの「メレンコリア」（1514年）から第一次世界大戦までの400年を「テクネー」への「憂い」（メランコリー）でとおしてきたわけで、『行人』（1913年）および漱石の死もこの「帰結」の時期とほぼ一致する。日本の場合は、明治維新からこの時期までの50年を、「神は死んだ」という体験を持たずに、ひたすら「文明開化」としてとおしてきたのである。岡倉天心のいう「インドに発し中国を経て日本で完成した」というその「日本文化（法隆寺、茶の湯、能・狂言）」も、西欧文明に一応のところ屈したわけである。（これは余談だが、この岡倉天心の見解と似て正反対のそれが、ニーチェのいう「インドに発したアジア的なものを古代ギリシャの知性が撃退した」というものである。）とにかくそうした状況で、一郎は「孤独」を「すまい」と呼ぶわけである。これは、付け焼刃としての「西欧文明」に「空洞」を感じて、その空しさ・寂しさに知識人としての「良心」から懺悔した叫びが、「孤独なるものよ、汝はわがすまいなり」（独文の直訳なら「孤独よ、わが故郷なる孤独よ」）であるとも解釈できるが、一郎の「知性」からして、これは西欧流の「憂い」である。「知」は「テクネー」の母であり同時に告発者でもあるが、西欧型の「知」は「人間中心の弁証法」として、「行為」と同義である。これは「メレンコリア」から今日まで変わらない。これに対して純(?)日本型の「知」は「静観」であり、これは『草枕』の語り手のそれである。

山路を登りながら、こう考えた。

知に働けば角か立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。とかくに人の世は住みにくい。

住みにくさが高じると、安い所へ引き越したくなる。どこへ越しても住みにくいと悟った時、詩が生れて、画ができる。

彼は「人情」を極力排したところに「諦念」としての「芸術」を求める洋画家だが、今、熊本の城下を離れて山間の郡古井という湯治場へ向かっているが、途中立ち寄った茶屋で長良の乙女の伝説を聞かされる。万葉集にあるという乙女の辞世の句が彼の脳裏に焼きつく。乙女は「ささだおとこ」と「ささべおとこ」に求愛され、いずれにも靡きかねて淵に身を投げたのである。

あきづけばをばなが上に置く露の、  
けぬべくもわは、  
おもほゆるかも

妙齢の乙女になってふたりの男性に求愛されたわたしが、すすきの穂の上の露のように、季節のおわりにははかなく消えていきましょう。ところがこの乙女が、今度はオフィーリアになって、ちょうど以前と今のふたりのハムレットの違いに窮して、自らの判断力そのものと命を

も露のように消し去ったかのように、小川を流れていき、しまいにはその小川は隅田川となる。語り手自身、『ハムレット』や『ファウスト』は「人情」にどっぷり漬かっていて、西洋の芸術はいけないといいながら、その彼自身、「人情」を抜けきっていないのである。お郡美さんの顔に別れた夫への「憐れ」がのぞいたから、「これで画になる」と安堵する結末もまさしく「人情」である。

一郎の「孤独」は、こうしたレベルの「洒脱」な「静観」ではないのである。『草枕』の語り手は「行為」を避けるが、一郎の「孤独」は「行為」した結果の最後の「避難所」なのである。つまり西欧の「孤独」は、「テクネー」信仰の「条件」であり、「帰結」なのである。しかしそれはまた「出口」であり「出発点」でもあるのである。「市民化」した「近代的自我」が捨てた「中世」がかつての「故郷」であるとすれば、これから作る共同体もまた新しい「故郷」となるはずである。フランス、アイルランド、ドイツ、スペイン、そしてアフリカを「故郷」とする北米・中米・南米の住人が、現地を「郷土」とするのと同様である。ただ問題は文化史あるいは近代史のそれであって、一郎あるいは20世紀初頭の西欧の道行きである。一郎は、「孤独」を「わがすまい」と呼んだ。これは「実存は本質に先立つ」といったサルトルの「実存主義」の先取りである。「家族」「国家」「人類」「愛」といった人間を取り巻く「本性」およびその「継続」に対して、それよりも「孤独」としてあることのほうが、つまり「諦念」ではなく、日々「行動」として「瞬間」を生き抜くことのほうが「根本問題」であることを叫んだのである。これはたしかに救われない非人間的な地獄の叫びである。しかしこれが一郎にとっては、真実であり、自らに対して誠実な態度なのである。「病める者」のほうに認識する眼があるという思想は、ドイツ文学関係では、シラーの「情感的概念」、ニーチェの『曙光』第二部第114節「苦悩者の認識について」、トーマス・マンの『トーニオ・クレイガー』等に見られるが、洋の東西を問わず、文学作品の多くがそうした眼差しで描かれていると思うし、主人公等に多く反映していると思う。筆者には、一郎の叫びは、40年以前にはすでにドストエフスキーが発し、そして40年後には、トーマス・マンの『ファウスト博士』(1943-1947年)の主人公アードリアン・レーヴァーキューンの「ペーターベンの第九交響曲を撤回してみせる」(「天国の娘である女神歓喜よ、人類はあなたのやさしいつばさの庇護のもと、みな同胞となる」というシラーの詩による合唱つきの交響曲の撤回)という叫びとなって受け継がれているように思われる。つまり同種の叫びである。あるいはまたゲーテの『ファウスト』のキー・ワードである「人間は努力する限り迷うものだ」の焼き直しとして。ただ、一郎の「孤独」「迷い」「憂い」がどこまで漱石自身のもので、どこまで西欧思想の模倣なのかは謎である。いずれにせよ、漱石が90年後の現在に蘇って、現代の人類の「テクネー」の進歩と、依然として深まる一方の「混迷」とをみて、理想的「故郷(郷土)」だとはいわないであろうことはたしかである。

## II 科学的精神と魔術 『ファウスト』の憂い

実在したファウスト博士のモデルとしては、1509年1月15日にハイデルベルク大学哲学部に入学を許可された16人のなかに、ズィンメルンのヨーハン・ファウストなる人物がいたそうであるが、世代としては、エラスムス(1465-1536)、デューラー(1471-1528)、ルター(1483-1546)の次世代か弟といったところである。しかし彼ら三人は当代随一の傑出した学者、画家、宗教家であり、これに比してヨーハン・ファウストは、遍歴学生、詐欺師、三百代言等の域を出なかったかもしれない。もしそんな彼に、似非スコラ哲学者、似非錬金術師、似非天

文学者、似非占星術師、にせ医者の類の悪事の数々が讒言として追加され、天下の大悪漢が誕生したとしても不思議はない。この場合、「似非」「にせ」か「本物」かという区別はあまり意味がない。つまりノストラダム(=ノートルダム)のミシェルの予言は当たらなかったが、現代人の我々でさえ、ヒヤヒヤさせられたのである。つまり知識と願望の区別がつかない時代の産物なのである。人間のこうした知識欲、「世界習得」への「努力」、現代的に言えば、[真理]を「追究」する「科学的探究心」は、当時の科学のレベルからすればこうした形をとらざるをえなかったのである。この行為は、[聖書]を超える行為であり、神に背くものであったため、宗教の立場から、悪魔に荷担する、あるいは悪魔と契約した行為、「魔術」とレッテルを貼られたのである。その急先鋒がルターであった。

(コペルニクスとかいう)売り出しの占星術師のことを思い出したが、この男は大地のほうに動かされ動き回るということを証明したいと考えておる始末で、天と蒼穹が動くのではないんだとか…しかしまあ、賢くありたいと思う者は、それは奇抜なことをしてかさなくてはならんわけだ、それしかないというわけだろう。この馬鹿者は天文学のすべてをひっくり返そうと企んでおる。しかし聖書にもあるとおり、ヨシュアは太陽に止まれと命じたのであって、地上にはないのだが。

「宗教」と「科学」、[信仰]と「知性」、[良心]と「魔術」、「迷信」と「真理」の対比が明確になったが、これは我々現代人の眼にそう写るのであって、ルターの時代には事情は異なるのである。「人間中心のルネサンス」の洗礼を受け、人間が自らの「知性」を信奉し、「聖書」を離れ「科学」を自らの真正な「道具」としたとき、権威としての宗教が断罪したのである。ルター歿後40年の1587年に、ルター派穏健派の立場から書かれた匿名の書『ヨーハン・ファウスト博士の物語』がフランクフルトの書肆から出版されたのである。この書物は「物語」の部分に古典語「ヒストーリア」と表現されているため、通称『ヒストーリア』と呼ばれる。このファウスト博士は、悪魔と血の契約を交わしたため、空中飛行等の現代では珍しくもない「魔術」を遂行・享受したのち、契約どおり、24年後の深夜、悪魔たちによって惨殺され魂は地獄にもちさられるのである。現代ならノーベル賞を受賞するような研究・業績をあげても、それは「魔術」なのである。それは神の道に背いたからである。ファウストの「憂い」はこの「疚しさ」にある。しかしそれでも「人間の自由」と「世界の享受」を選んだのである。

『ヒストーリア』はオランダ語にも訳され、海をわたってイギリスに上陸する。これを読んだクリストファー・マーロー(1564-1593年)は早速これを人間の「神への挑戦」の悲劇として改作する。出版・初演は確証に乏しいが、早ければ翌1588年だそうである。人間の「賢しさ」の限界を知り、しかしその「宿命」を嘆くと同時に非情さを天に向かって訴える点で、ソポクレスの『オイディプス王』とほぼ同じ構図をとる。その間の2000年をどう解釈すべきか。古代ギリシャも近世初期も「人間の問題」は一向に変わらないととるべきか。その意味では、20世紀の核開発もミレニアムの節目を越えた今世紀のサイバネティックスもただの「衣替え」にすぎないことになるのだが。「いや進歩したのだ」ととれば、近世初期、あるいはルネサンス、あるいは中世末期にすでに、人間は「科学の、科学による、科学のための」中立あるいは独立宣言をしたといえようか。「人間のための」独立宣言なら結構なのだが、政治用語では必要悪を「抑止力」と呼ぶ。ともかく、マーローのファウストの「憂い」は、「人間の賢しさになせ

限界があるんだ」というものである。ファウストの死は、ギリシャ悲劇の形式を踏襲して、クロス(合唱)によって告知される。

雲を衝かんとする枝も今は折れ、  
 [叡知の神]アポロンの月桂樹の緑の若枝も燃えつき、  
 かつては賢しかったこの男の枝の葉叢も無常の掟に従い、  
 ファウストはついに逝ってしまった。随地獄の様をみるがよい、  
 この男の不幸が賢しい者たちの戒めとなり、こののち  
 禁断の叡知に憂き身をやつすことのないように。  
 叡知の深みが性急な地上の知を誘い、  
 得るものとして魂の安息には無用というもの。

1600年代に入って、マローの『ファウスト博士』はイギリスの旅回りの一座たちによって、また海をわたるのであり、これが人形芝居等に翻案され、広くドイツの庶民に愛されることになる。そしてゲーテも、『若きウェルテルの悩み』(1774年)の前年にはすでに悲劇の構想を立てている。『ファウスト第一部』は1808年に、そして第二部は彼の死後、すでに没年の1832年に出版された。つまり、ゲーテの『ファウスト』は、疾風怒濤期に構想され、特に第二部は老齢の境地をもって描かれた大作なのである。

ゲーテのファウスト像は、一言でいえば、「憂いの克服」である。現代の科学がその限界を次々と克服し、着実にその成果を上げ、人類は(正確に言えばその一部が)その恩恵に浴しているわけだが、一方で、科学には自己管理ないし自己省察の能力が欠けているので、人間がそれにあたらなければならない。ところが、人間が完全でないこと、あるいは迷うから人間なのであること、そうしたことは人間自身が一番よくこころえているのである。このことを「憂慮」する科学者もいれば、「国策」を優先する科学者もいる。後者はひょっとすると、『ヒストリア』のファウスト以下だともいえようし、すでに悪魔の虜であり、悪霊そのものである。

この都[子羊の花嫁=イエルサレム]の外には、犬ども、魔術師ども、淫らな者ども、人殺し、偶像を崇める者、誰であれ嘘を愛し行う者が徘徊する。(ヨハネの黙示録 22-15)

科学の水準の差はあれ、ゲーテのファウストは、「科学者」として、中世末期を舞台に、世界と宇宙を習得しようと努力し、自らに誠実に「行動」する。「努力する限り迷う」けれども、「憂い」は「行動」と「盲目による錯覚」によって「克服」されるのである。

第一部のテーマは、「学者悲劇」と「グレートヒェン悲劇」であり、第一部と第二部の間に「癒しの忘却」がはさみこまれ、第二部のテーマは「復活」「魔術」「根源への旅」「婚姻と家庭」「権力闘争」「干拓工事」「憂いと対話」「憂いと決着」「脱デーモン化」(M. コメレル)そして「死と救済」である。「現世での活動」(「科学」としての「魔術」、「生命科学・考古学」としての「根源への旅」、「異文化・異教との融合」としての「婚姻と家庭」、「政治学・人間学」としての「権力闘争」、「自然の克服・破壊」としての「干拓工事」)を終えたファウストは、「憂い」の訪問をうけるが、問答の末、「盲目」を代償に追い払う。この盲目が幸いして、彼

の墓穴を掘る掘削音を干拓工事のそれと錯覚して、完成後の様を思い描き、その「瞬間=情景」に対して、「生まれ、おまえはいかにも美しい」といってしまう。この言葉はメフィストフェレスに魂を提供する「約定」の言葉であったため、それはファウストの「肉体の死」を意味した。また「満足」とは「努力」と「行動」の停止をも意味するので、科学者ファウストの「活動」も停止する。さて生きた魂をもらおうとしたメフィストフェレスだが、天使の合唱によって体が痺れて動かない。そもそも神との「約定」が「ファウストがこの世にある限りおまえのしたいようにしてよい」であったため、もうすでにこの世のものでない彼の魂は、「約定」上、悪魔メフィストのものではなく、神のものである。肉体上の死をもって、「科学者」ファウストの「努力」「迷い」「活動」は停止した。「宗教」と「神」を離れ、最後には「魔術」（悪魔の手）をも振り切ったファウスト自身に、その後のことはどうでもよいのであるが、第二部の結末、すなわち『ファウスト』全篇の締めくくりに、ファウストの与かり知らぬところで、彼の救済がとりおこなわれる。ファウストの霊がかつてグレートヒエンとよばれた贖罪女を追い求めつき従うかたちで、そして他の贖罪女にまじって、この贖罪女もマリアにつき従い上昇するのである。

（神秘の合唱） すべて移ろい行くものは、  
永遠なるものの比喩にすぎず、  
かつて満たされざりしもの、  
今ここに満たさる。  
名状すべからざるもの、  
ここに遂げられたり。  
永遠にして女性的なるもの、  
われらを引きて昇らしむ。 （高橋義孝訳）

悲劇第一部の冒頭に、第一部の門扉ないし前庭として、第一部のというよりは、全篇の前置きとして、「献辞」、「漫才」、「天上の約定」が巻頭を飾る。いずれも短い、「天上の約定」で、全知全能のオプティミスト・神と否定精神のオプティミスト・メフィストが互いに自分の優位を誇るが、「人間は努力する限り迷うものだ」とする神の手にいっばいくわされたメフィストは、その「迷う」人間を「悪魔の道」に迷わせて、今回は久しぶりに魂をいただこうと思う。ところが「約定」は、「あの男が地上にいる限りすきにしてよい」なのであって、はじめから、メフィストに勝ち目はなかった。「肉体の死」までは勝手にしてよい」なのであって、よくてただ働きのおめでたい「家庭教師」にすぎないのである。いわば神のほうに詐欺師なのである。その意味でメフィストは、否定精神というよりは、人間の科学的叡知を、時代にさきがけて先導する、「科学的精神」の権化であるとさえいえるのではあるまいか。ただもちろんファウストは「人間の、人間による、人間のための」科学を志向し、人間の尺度を超えた「科学」＝「魔術」を拒絶する。あるいはしたいと願う。その「願望」が「憂い」である。「憂い」によって息を吹きかけられ、人間の本来である「迷い」＝「無明」（盲目）に立ち返り、しかしその結果の「錯覚」によって「満足」を味わいたファウストに与えられたものは、「寿命」という「恩寵」であった。「人間は万物の尺度」だが、「科学」が「万物の尺度」なのではない。神と悪魔と科学を離れ、人間の本来の姿にもどって、「地上」を「肯定」して（「生まれ、おまえはいか

にも美しい)、ファウストの肉体は死を甘受する。

### III 「憂い」の正体

干拓工事の完成と航行の安全監視の観点から、領主(現代の感覚でいえば行政のトップ)であるファウストに、ひとつだけ目障りなものがあつた。それは太古の昔からある二本の菩提樹とそこに住む老夫婦の茅屋とであつた。この土地は、ひとつには、干拓も進んでずいぶん遠くまで押し戻された海と同様に、むしろ大自然の一部であり、自然との共生を象徴するものである。またそれらは「神話」の遺物でもあり、近代的「科学的精神」の権化であるファウストには、不似合いな邪魔物でしかない。ファウストは、ここに、菩提樹を活かして海を監視する展望台を築こうと考えたのである。この展望台は「自然」を克服しようとする人間の「意志」の象徴であり、いわば人間の側の「砦」となるはずである。ファウストの善意は、老夫婦にはもっと住みよい土地と家屋を提供すればよいと打算する。しかし老夫婦は自然との共生を望み、退去には応じない。礼を尽くして移ってもらうようにとの命をうけて派遣されたメフィストフェレスは、はじめから始末をつけるつもりでいる。三人の暴力漢をつれて乗り込んだ彼に、以前に難破した折、命を救ってもらったことのある船乗り(ゼウスのお忍び姿)が、今は旅人となって老夫婦の世話になっていて、この旅人が老夫婦の肩を持って当然多少の抵抗をしたので、それを勿怪の幸いに、あっさり三人とも片付けてしまつて、茅屋に火を放つ。夜中のその火事のありさまと破廉恥な火勢については、逐一、ファウストの屋敷の楼守リュンケウス(以前はアルゴ号の船頭だった男)によって、舞台中央のファウストに、「高み」から報告される。ファウストは「罪」を犯したのである。しかし彼にその意識はない。あるとすれば、心の奥底の底の底にであり、それは「憂い」と呼ばれるべきはずのものである。「自然」と「神話」から疎外されることに対する「心の痛み」と、それらを破壊することに対する「心の疚しさ」とである。デューラーの「メレンコリア」(1514年)の「憂い」である。それはファウストにとって、「魔術」と「科学」からの解放を促す「良心」といってよいが、そればかりはできない相談というものである。「近代的自我」(テクネーだけが頼りのエゴ)にとって、後戻りはできないのである。そこで「憂い」みずからがファウストを訪れるのである。

深夜、ファウストの屋敷を四人の老婆が訪れる。四人は「Mangel」、「Schuld」、「Sorge」そして「Not」である。ドイツ語をカタカナで表記すると、「マンゲル」「シュルト」「ゾルゲ」そして「ノート」である。普通に和訳すると、「欠乏」「罪(あるいは借金)」「憂い」そして「困窮」となる。普通の庶民を例外なく訪れて苦しめるものと考えれば、「欠乏」「借金(ローン)」「心配」「困苦」といいかえてもよい。さて、老婆四人のあとから彼らの兄貴分の「Tod(トート)」(死)が近づいてくる。「あれあれあそこにお兄さまのトートが」という話し声は、ファウストの耳に残る。なにやら「ノート」とか「トート」とかいつておったぞと。「ノート」と「トート」は韻を踏んでいるが、当然のこととして、人生の「困苦」のあとに「死」が訪れる。四人の老婆のうち、「欠乏」「借金」「困窮」の三人はファウストの屋敷に入れない。ファウストが富貴の人だからである。憂いとファウストの間答が続き、最後の文句はこうである。

憂い わたしが素早く呪って、  
あなたに背を向けますから、まあそれからわたしの力の程を思い知るがいい。  
人間は一生涯盲目(めしい)なのです。

だから、ファウストさん、あなたも今は盲目におなりなさいな。  
 (彼に息を吹きかける)

ファウスト(盲目となって)夜は次第に更けてきたらしい。

だが、己の心の中には、明るい火が燃えている。

考えてきたことは、早急に実現させよう。

主人の言葉ほど重いものはない。

家来ども、一人残らず寢床から起き出せ。

己が大胆に思案したことを立派に実現せい。

道具を執れ。鋤鋤を動かせ。

予定の仕事を直ちに仕上げろ。

厳格な秩序を守り、急いで精を出せば、

功業はたちどころに成るのだ。

この一大事業が完成するには、

幾千の手を指図する一つの精神があれば足りる。(高橋義孝訳)

死すべき者の誰も逃れることのできない「憂い」の訪問をうけたファウストだが、M. コメレルによれば、老婆四人は、二本の菩提樹と茅屋の焼け跡の煙から出てきたという。老夫婦と旅人の死骸も一緒に燃え尽きた焼け跡の煙からである。その意味で、「Schuld」は「借金」ではなく、「罪」となる。また、四人の老婆はデーモンたちであるという。しかし、ファウストは「盲目」という代償を支払うだけで、「憂い」に総括されるデーモンたちを退けたという。すでに悪魔メフィストフェレスとその魔術からの解放の準備がなされたという。一大事業の完成のために、悪魔の手を借りずに人間おのれ一人で成しえた「完成」の様を夢見たのである。つまり「盲目」となったから「錯覚」したのである。その刹那、その情景=瞬間に満足して、「止まれ、おまえはいかにも美しい」といって、地上での行動・活動を停止したのである。それはデーモンである四人姉妹の兄であり頭領である「死」の訪れであった。してみると、この「死」は「完成」であり、すでに「祝福」である。

筆者が思うに、「憂い」とは、第一部の「夜」の場面での、地霊に引き比べて、おのれの矮小さを知り自殺を試みるファウストの、「人間」としての「自己認識」が、たびたび彼を襲った「憂い」であると思うし(学者悲劇)、また、グレートヒェンを妊娠させ、彼女の母と兄をも死なせ、さらには彼女自身を赤子殺しの咎により刑死させるにいたったことへの自責の念が、まさに「憂い」である。このふたつの「憂い」は「忘却」によって消し去られるが、依然として彼を苦しめるものは、メフィストフェレスの存在と彼の魔術であった。それなくしては、第二部のファウストの「科学的精神」としての「努力」も緒につかなかったわけだが、彼は、最後には、この「魔術」と訣別したかったのである。これが彼の心の奥底に潜む「憂悶」であり、その具体化が老夫婦の「死」である。「干拓工事」は「善」であったが、「神話」と「自然」への冒涇でもあることが、なにか釈然としないものとして、彼の心にくすぶり続けたのである。これがファウストの、全人類の「憂い」である。ファウストの残した領地は、しばらくは、善き民の「故郷」となったことであろう。それとも彼の「霊」が「永遠にして女性的なるもの」によって「引かれ昇る」ところこそ、「永遠」の、「真」の「故郷」であり、選ばれた者のみがこの故郷に帰郷できるのだろうか。ゲーテのウェルテルが、一足先に行ってロッテを待つとい

うあの「来世」、漱石の『幻影の盾』の恋人たちが暮らす「楽園」が本当の「故郷」なのだろうか。まぼろしの盾、遺影の盾がそこへ導いてくれるというのだろうか。空蟬がまぼろしであればよいと念じることによって。ファウストの「憂い」とは、デューラーの「騎士、悪魔、死神」(1515年)によく表現されていると思う。ファウストが騎士、メフィストフェレスが悪魔、死神が、欠乏・罪・憂い・困苦の頭領である。現代人は、テクネー(知の実践、科学的技芸)だけを頼りに、ひたすら放浪するほかはない。我々に故郷などない。しかしそんなに孤独でもない。つまりいい加減に生きている。

こうした状況は、ふつう「ニヒリズム」と呼ばれる。これを120年前に、ニーチェが、「超人」(スーパーマン)と「永劫回帰」を提唱して「克服」しようと試みた。「ニヒル」とは「虚無」だから、「ニヒリズム」とは、第一に、キリスト教と仏教による「地上」の否定、次に、「宗教」と「信仰」からの解放(「テクネー」信奉)、つまり「神」の不在、最後に「科学至上主義」による「人間」不在という、少なくとも三種類の「無」をいう。つまり「故郷」の喪失である。言葉の問題として、「ニヒリズム」は日本語である。英語でもなければ、ドイツ語でもフランス語でもない。英語は nihilism(ナイアリズム)、ドイツ語は Nihilismus(ニヒリスムス)、フランス語は nihilisme(ニイリスム)、イタリア語は nichilismo(ニキリズモ)、ロシア語は nihilizm(ニギリズム)だからである。

ニーチェ研究家の W. ミュラー-ラウターによると(『ニーチェ』 諸対立の彼の哲学と彼の哲学の諸対立 1971年)、「ニヒリズムを最初に言い出したのは、前世紀中葉までそう信じられていた、19世紀のロシアの思想家たちではなく、この言葉はそれ以前に、すでにフランス革命時にフランス人によって使用された造語だそうである。つまり「信条」として、「貴族階級」、「聖職者階級」そして「平民」のいずれに対しても、賛意を表し「ない」、何にも「政治的信条」をもたない者たちというわけで、彼らにつけられた名称が「持たざる者」(nihiliste)であったというものである。つまり60・70年代の日本の「ノンポリ」とよく似た表現であったわけであろう。

(2004年11月15日受理)